

台灣日本語文學報

30

【刊行の辞】

- 曾 秋桂 『台湾日本語文学報』30号刊行序文…………… 1

【論文】

- 曾 秋桂 『半日』に見られる作者の言説ストラテジ——森鷗外から明治社会への視座—— 3
 戸田 一康 葉石濤の「春怨」——その虚構の構造——…………… 27
 頼 雲荘 太宰治『パンドラの匣』論——書簡形式の小説における語りについて——…………… 53
 王 薇婷 川端康成「十六歳の日記」の自作解説——昭和初期「子供の綴方」との関連性をめぐって——…………… 77
 廖 秀娟 太宰治「十二月八日」論——隠蔽される妻の思い——…………… 101
 林 雪星 牛島春子作品における通訳者の表象——『王属官』『祝といふ男』を中心に——…………… 123
 王 世和 名詞止め表現の性格、体系と表現効果の一試論…………… 149
 林 青樺 「一てもいい」の意味機能に関する一考察——未実現の事象を中心に——…………… 169
 吉田 妙子 ソダの齋す結束性…………… 193
 黄 其正 「一そこなう」の事象表現機能についての一考察…………… 219
 洪 心怡 日本語の促音の知覚研究——閉鎖持続時間、先行母音長を主な変数に——…………… 245
 呉 秦芳 会話における発話の「重なり」について——『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』の「課題指向対話」による事例の考察——…………… 267
 落合 由治 ジャンル性における小説テキスト——芥川龍之介の「歴史王朝物」の文章構成——…………… 293
 林 慧君 字音形態素「～風」の接尾辞的用法——日本語と中国語の対照を通して——…………… 319
 加賀美常美代
 堀切友紀子 台湾における学生の日本イメージ形成——日本への関心度と知識との関連から——…………… 345
 守谷 智美
 楊 孟勲
 盧 錦姬 台湾の大学生の日本語学習ビリーフと学習ストラテジーに関する調査研究——日本語専攻者を中心として——…………… 369
 羅 曉勤 台湾人日本語学習者から見たピア・レスポンスの可能性——TEAステップ式質的手法を用いて——…………… 393
 頼 鈺菁 近世武士の忠誠観——赤穂事件をめぐって——…………… 419

【教育研究報告】

- 陳 姿菁 表現力の向上を目指す会話授業の試み——「高級日語会話」を例に——…………… 441
 許 均瑞 「新聞日本語」による日本語学習者の「問題発見力」を育成する試み——新聞全紙面の実施を中心に——…………… 465
 王 玉玲 台湾の家庭内における日本語の習得研究——縦断的考察に基づいて——…………… 491

【活動彙報】

- 2011年7月～12月例会要旨および活動報告…………… 517

2011年12月
台灣日本語文學會

台灣日本語文學報

30

台灣日本語文學報30

台灣日本語文學會

2011年12月

2011年12月

台灣日本語文學會

從芥川龍之介王朝歷史小說的文章結構論述類型性中 小說文本的意義

落合由治

淡江大學日文系教授

摘要

社會上廣被使用的文章類型概念，其實沒有明確的定義以及分類基準，於是當使用於研究上更需謹慎小心。鑑於此本論文注意到類型分類，深深地影響了文學作品的解讀，因此特別選定在文章結構雷同性很高的芥川龍之介的王朝歷史小說代表作《羅生門》以及基督教小說代表作《南京的基督》，作為分析的樣本，進行文章結構對比的分析。並且再從中探析出怎麼樣的文章元素，是造成王朝歷史小說與基督教小說分類的差異。

考察所得結果如下列 2 點：

(1) 王朝歷史小說《羅生門》與基督教小說《南京的基督》的文章結構，其實是同出一轍。

(2) 決定王朝歷史小說與基督教小說差異的最根本關鍵，在於作品中的歷史、基督、地域等相關的使用類型語彙，以及文章脈絡中，固定意思的辭彙，被活絡成多義性的詞彙。

截至目前的學界的思維是一般文章所指向的外在指示對象（世界）決定文章類型。而歷經本次的考察結果顯示，其實不然。證明是接受者（讀者）在接受語彙的符碼時，以某種圖像浮現出外在的指示對象（世界），才會形成文章類型的差異。而不是在於文章的結構本身。此發現可以提供重新審思文章類型概念延用的可行性與極限。

關鍵字：小說文本 類型 語彙 指示對象 符碼

**A genre characteristics in novel text: Some considerations by
text constitution of Akutagawa Ryunosuke's "Rekishi Oucho Mono"**

Ochiai Yuji

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

The concept of text genre does not have a clear definition and classification standard in social usage. The concept of text genre is the term which attention needs in study of human cultural science. Therefore, as for this article chose the best work "Rashomon" in "Rekishi Oucho Mono" and a famous work "Christ of Nanjing" in "Kirishitan Mono" of Ryunosuke Akutagawa as samples of analysis about the literary work that the problem of the genre classification is important. In this study, I have considered some elements in text concerning to genre classification from the viewpoint of text constitution.

As a result of consideration, the following points are clarified.
(1)The text constitutions of "Rashomon" in "Rekishi Oucho Mono" and "Christ of Nanjing" in "Kirishitan Mono" are quite the same sturcture.
(2)The current standard of the genre decision to divide "Rekishi Oucho Mono" and "Kirishitan Mono" is the vocabulary. The kinds are the genre giving vocabularies related to the history, Christian, and the region, etc. in the work. Another kind is a polysemy vocabulary with a peculiar meaning for the first time in the context.

It has been thought that the external instruction object (world) that texts direct has decided the text genre so far. However, it should be thought that the sign of vocabulary that a recipient has received made the external instruction object (world) surface as a kind of figure from the above-mentioned result.

Keywords: novel text, genre, vocabulary, external instruction object, sign

ジャンル性における小説テキスト
—芥川龍之介の「歴史王朝物」の文章構成—
落合由治
淡江大学日本語文学科教授

要旨

社会的に広く用いられている文章のジャンルという概念は、明確な定義や分類基準がなく、研究で用いる場合には、慎重に扱う必要がある用語である。そこで本論文は、特にジャンル分類が作品の読みに影響する文学作品について、文章構成の類似度が高い芥川龍之介の「歴史王朝物」の代表作「羅生門」と「キリシタン物」の有名作「南京の基督」を分析のサンプルに選んで文章構成の把握をおこない、それに基づいてどのような文章中の要素が「歴史王朝物」「キリシタン物」というような作品ジャンル決定に関わったと想定されるかを考察した。

考察の結果、以下の点が明らかになった。

- (1) 「歴史王朝物」の「羅生門」と「キリシタン物」の「南京の基督」の文章構成はまったく同一である。
- (2) 「歴史王朝物」と「キリシタン物」という従来のジャンル決定の基準に成っていたのは、作品中の歴史、キリシタン、地域などに関わるジャンル付与語彙と、それが作る文脈の中で固有の意味を初めて持つ多義的語彙である。

以上の結果から、従来は文章の指示する外的指示対象（世界）が文章ジャンルを決めているように考えられてきたが、そうではなく、受容者が受容した語彙の記号性が外的指示対象（世界）を一種の図として浮上させていたと考えられる。

キーワード：小説テキスト ジャンル 語彙 指示対象 記号

ジャンル性における小説テキスト
—芥川龍之介の「歴史王朝物」の文章構成—
落合由治
淡江大学日本語文学科教授

1. はじめに

社会的に産出されている各種の表現成果に関するジャンル区分は、社会生活はもちろん創作、芸術活動はもとより、出版、メディア、研究、教育などで広義のテキストに関わる多様な表現成果¹を分類する場合に便宜的に広く用いられている概念である。課題を言語的テキストに限っても、ジャンルは広く社会的に「部門・種類。特に、詩・小説・戯曲など文芸作品の様式上の種類・種別」²を漠然と指す概念として、たとえば教育目的で「小説、詩、随筆、短歌、鑑賞文」³のように文章の種類を示す用語として分類レベルの異なる用語が同列に用いられていたり、「アクション小説、SF小説、海洋冒険小説、学園小説」⁴などのように目安として小説のストーリーや内容を示す用語として使われたりしている。こうした社会的に産出さ

¹ 本論での広義のテキストとは、人間の表現活動による表現物全般を指す。その性質は、ロラン・バルト（1979）が「作者の死」で主張したように、作者が表現を通じて伝えようとした内容だけが重要だとする「作品」を超えた概念である。さらに、石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織（1991）が述べるように「作品」においては、生産者である作者が、記号表現を通じて伝えようとしていた記号内容が重要なものであり、たった一つの記号内容だけが、記号内容から読み取られる」のに対して「テキスト」は、先行、同時代の諸テキストの引用の織物であり、範列（パラディグム）と連辞（シンタグム）の交錯であり、諸コードの相互変換の場であり、異なる言葉の対話の場であり、なによりも自らが諸テキストの錯綜体であるところの読者がかかわることによって、意味が生産される動的な場」（P5-6）である。表現面で言えば言語非言語の表現を問わず時枝誠記（1960）が定義する「統一構造を持った一全体」としての「質的統一性」（P13）を意味する。

² 岩波書店（2004）『広辞苑第5版』の「ジャンル」の定義。ジャンルは、現在では広く表現物全般に使われており、この定義では十分とは言えない。三省堂『大辞林』、小学館『大辞泉』もほぼ同じ定義をしている。

³ 東京書籍（2011）の中学校用教材のジャンル分類に拠る。ここに見られる「小説、詩、随筆」の区分は文章ジャンルとしては一般的だが、「短歌」は「詩」の下位分類と言え、また「鑑賞文」は「評論」の下位分類と言え。分類基準の異なる用語が教科書の教材分類でも漠然と用いられている。

⁴ 現在の日本社会における小説ジャンルに関する社会通念の例として Wikipedia 「Category:小説のジャンル」を代表例に取り上げた。この他、「官能小説、経済小説」など 17 のカテゴリーがあり、さらに 44 の下位分類が行なわれている。（2011 年 7 月 30 日閲覧）

れている各種の表現成果に関するジャンル区分は、便宜的ではあっても社会生活上は必要で有意義な概念と言えるであろう。

しかし、テキストに関わる多様な表現成果を研究対象とする場合には、ジャンルは明確に定義しづらい議論の多い概念である。日本語学、日本語教育学では明確な定義は見られない⁵。文学では武田庄三郎(1985)がジャンルの問題に関して、以下のように述べている。

ラテン語の *genus* (種類) に由来。文芸研究・観察上の概念としては文芸の種類を意味する。それは「理想型」のごときものであるばかりでなく、この理想型自体、歴史的に生成、発展、変化、分化、隆替、衰滅する。分類のしかたはいろいろあり、(1)言語形式にもとづく場合(韻文と散文、口承文芸と記載文芸といった区別)、(2)表現対象にもとづく場合(個人文芸と集団文芸、厳粛な文芸と滑稽な文芸など)、(3)表現のありようにもとづく場合(叙情詩と叙事詩と劇と)などがあるが、(3)がもっともふつうかつ重要である⁶。

武田庄三郎(1985)は、ヨーロッパ文芸学のジャンル論を踏まえた定義で、内容として理論的根拠があり、「表現のありようにもとづく場合」、つまり表現主体の意図によって生じる表現形式の選択による分類がジャンル区分の基本となるとしている。そこで、本論文では、表現主体の意図によって生じる表現形式の選択の結果であるテキストの観点から、文章表現におけるジャンル性の問題を考えてみたい。対象としてジャンル区分が研究上、非常に大きな意味を持っていると考えられる文学テキストを取り上げる。

その点から見ると、芥川龍之介(1892(明治25年)～1927(昭和2年)、以下、芥川)は、文学テキストにおけるジャンル性の問題を考察するとき最も適した作家の一人と言えよう。芥川龍之介の小説作品のジャンルに関連する指摘は多いが、もっとも早い時期の一

⁵ 国語学会編(1973)、国語学会編(1980)、日本語学会編(2007)にはジャンルに関する定義は項目として立てられてない。日本語教育学会(1987)でもジャンルに関する定義は行なわれていない。日本語教育学会(2005)では項目説明に使われた用語ジャンルを索引に挙げているが、説明項目は立てていない。

⁶ 武田庄三郎(1985) P313

例として、萩原朔太郎（1942）が芥川作品のジャンル区分の問題について以下のように指摘している。

芥川龍之介ほど、多くの矛盾した毀誉褒貶の批評を受けている文学者はない。或る人は彼の文学を典型的の近代小説と評し、他の人はそれを一種のエッセイにすぎないといふ。一方では彼を詩人と称し、彼の作品を散文詩だといふ人があるに対して、一方では反対に、指摘情操なんか少しもなく、素質的に詩を持たなかった文学者だといふ人もある。（中略）／すべて之等の矛盾した、両極端に正反対の批評は、芥川龍之介の場合に於いて、各一面の真理を持ってゐる。（中略）そしてまた彼の文学は、実際に小説でもあり、エッセイでもあり、同時にまたそのどつちでも無かつた⁷。（注：／は改行、原文旧仮名遣いのまま）

芥川の同時代人である萩原朔太郎（1942）の指摘は、芥川の在世当時から、「小説でもあり、エッセイでもあり、同時にまたそのどつちでも無」いような作品分類上の基本的問題があり、芥川作品を読む場合このジャンル区分の問題が受容者にとって作品理解の上で大きな課題になっていたことを示している。言い換えれば、芥川作品に関しては、たとえば小説として読むかエッセイとして読むか、あるいは散文詩として読むかで作品を解釈する方向性が大きく変わるばかりでなく、文学的意義やテーマの理解に関しても評価を二分するような結果になってきたということである。そうした芥川作品の特徴は、今まで文章構成やテクスト的特徴に関わる研究において主に捉えられてきた⁸。

このように芥川作品に関してジャンル区分の問題は、小説か詩かというような作品の文章の基本的種類分けに関わる課題を含んでおり、同時に先に述べたジャンル区分における表現主体の意図によ

⁷ 萩原朔太郎（1942）P10。

⁸ 芥川作品に関する文章構成や文体を扱った論文は多い。一例として最も早いものとして波多野完治（1940）、小林英夫（1940）など第二次大戦前から研究が始まり、戦後も根岸正純（1967）、中村明（1967）を始め、永尾章曹（1992）など文体、文章構成に関わる研究がおこなわれてきた。現在でも藤井俊博（2003、2004）など、関係した研究が続いている。

って生じる表現形式の選択の問題とも深く関わっていると言えよう。ここでは、まずジャンル区分において芥川が持つ、分類を超えたテクスト的特性をマルチ・ジャンル性と呼ぶことにする。

2. 芥川作品のジャンル性と歴史性との関係

つづいて、具体的な研究対象の確定に入りたい。その点から言えば、芥川作品の中で小説として現在も評価され読まれ続けている作品ジャンルの一つは「歴史王朝物」である⁹。芥川は日本近代文学の中で独自の歴史小説をジャンルとして確立した作家の一人と言えよう。しかし、芥川の歴史小説関係には「歴史小説」、「王朝物」、「歴史王朝物」、「今昔物」など様々な呼称があり、作品分類は論者によって様々で分類基準も実は明確ではない。仮に最近の芥川作品のジャンル分類の一例として、芥川の小説に関わる作品論を集めた翰林書房（1999、2000）を目安にすると、以下の表1のようになる。表1の網掛け部分のように「今昔物語」関係と「歴史王朝物」には平安時代を舞台にした「羅生門」、「鼻」、「芋粥」、「偷盗」、「袈裟と盛遠」、「地獄変」、「邪宗門」、「藪の中」と江戸時代を舞台にした「戯作三昧」、「枯野抄」が含まれている。しかし、「キリシタン物」にも戦国時代を舞台にした「奉教人の死」、「神神の微笑」がある。また、「児童文学」に分類された「犬と猫」は日本の神話時代、「杜子春」は唐の時代で、これらも時空を遡った世界を描くという意味では歴史小説に分類できる。さらに、「開化期」物も、芥川の同時代でない明治期を舞台とした作品として、「歴史物」と見ることもできる。一方、「現代物」（枠囲い）には「手巾」、「秋」、「庭」、「寒さ」、「少年」、「大導寺信輔の半生」、「点鬼簿」が収録されているが、「児童文学」に分類された「白」、「蜜柑」、「トロッコ」は芥川の同時代を描いている点で「現代物」に入れても不自然ではない。これを見ると現在、

⁹ 一例として「羅生門」は、2010年だけでも吉田裕久他（2010）、二杉健（2010）、小谷瑛輔（2010）、清水康次（2010）金偉・呉彦（2010）、矢原豊祥（2010）、小谷野敦（2010）などの研究が出され、文学研究にとどまらず高等学校の国語教材としても、様々な読みの可能性を探る素材として活発な研究が行われている。

文学研究で使われている芥川作品のジャンル分類には明確な基準がなく、便宜的なジャンル区分で研究が行われていることが分かる。

表1 芥川作品のジャンル分類例¹⁰

ジャンル名	作品名
「今昔物語」関係と「歴史王朝物」 (網掛け)	「羅生門」、「鼻」、「芋粥」、「偷盗」、「戯作三昧」、「袈裟と盛遠」、「地獄変」、「邪宗門」、「枯野抄」、「藪の中」
「キリシタン物」 (波線)	「奉教人の死」、「きりしとほろ上人伝」、「南京の基督」、「神神の微笑」、「西方の人」
「開化期・現代物」 (二重線) (枠囲い)	「手巾」、「舞踏会」、「秋」、「庭」、「お富の貞操」、「雛」、「寒さ」、「少年」、「大導寺信輔の半生」、「点鬼簿」
「児童文学」 (斜体)	「蜘蛛の糸」、「犬と笛」、「杜子春」、「白」、「蜜柑」、「トロッコ」

しかし、こうした芥川作品のジャンル区分の中で注目すべきことが二つある。第一は、第1節で述べた文体や文章の基本的類別の問題としてのジャンルに関わって、芥川の作品が現代でもその作品の読みに関して多様な論を生みだしているという点であろう。一例として、荒木正純（2010）は芥川の「羅生門」冒頭に見られる「蟋蟀」の語を明治時代特有の記号と捉え、当時の時代的文脈を再現する考察を行っている¹¹。また、教育の場でも吉田裕久他（2010）は、高等学校の授業で生徒に芥川作品の言語的特徴を捉える授業を行い、その結果、最初まったく内容が理解できなかった学習者が作品のテーマや語彙の象徴性などに目を向けるようになったと述べている¹²。

¹⁰ 浅野洋、海老井英次、石割透、清水康次、関口安義、宮坂覺編（1999-2000）に拠る。

¹¹ 荒木正純（2010）参照。第1部では「羅生門」冒頭の「所々丹塗の剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている」について、蟋蟀は原典（『今昔物語』巻29）にはない、草稿で何度も書き換えられた「記号」であり、明治期の蟋蟀の用例にキリギリスとコオロギの二つの読み方があったことを指摘している。そして、当時の実物の区別が明確ではない両義性は、明治時代にイソップ寓話「蟻とキリギリス」が薄田泣菫、田山花袋のキーツの訳詩などから生まれたとし、キリギリスは生（最盛期）と死（餓死）の記号であると述べている。

¹² 吉田裕久・山元隆春・朝倉孝之・岡本恵子・黒瀬直美・新治功・西原利典・増田知子・三根直美・宮本浩治（2010）参照。それによれば、吉田裕久他（2010）は、実際の高等学校の授業の中で、作品の言語的特徴を捉えることで、まず「境界の物語として読む」ことを明示した上で、プレテクスト『今昔物語集』とテクスト「羅生門」の位置づけから、コードや象徴を読み解く方法、次に「認識主体の育成をめざした」授業で、「何

芥川作品のジャンル区分の困難は、その作品が非常に複雑な言語的特徴を持っていることを示していると同時に、多くの論や教育成果が続けて生まれている点からは、その言語的表現構造が現代でもその機能を十分解明しつくせないほど緻密で、表現的生命を保っていることを示している。

第二はジャンル区分の重要な基準に使われている歴史性に関する問題であろう。実は文学にとどまらず、近年、哲学界、歴史学界では、小説的表現と歴史的記述との関係に関する問題が見直され、相継いで論が出されている¹³。それは研究ジャンル間の交錯ではなく、歴史という現象あるいは対象をどう言語的に描くかという、ヘイドン・ホワイトが提起した歴史記述に関する言語的問題（「言語論的転回」）から始まっている¹⁴。現在、問題とされている「言語論的転回」とは、歴史的事件や歴史的人物の事績という対象は、それを語る主体の存在とその語りなくしては成り立たず、歴史記述も歴史小説もある語り手が物語るという行為による言説であると言う点で、ナラティブ（語り）の問題を離れることが出来ないという物語論的ジレンマである。日本に招待された最近の講演の中でヘイドン・ホワイト（2009）は以下のように述べている。

今や、文学上のモダニズムに関する重要な論点は、事実に基づく言説とフィクションの言説の対立が、様々な種類の著述間の単なる差異に取って代わられるということなのだ。文学的な著述と実用的な著述の主要な違いは、メッセージに対する「構え」

が問題なのか」を発見する授業」を行い、そして「グループ学習で、「下人の行方を考える」学習課題を設定し、テキストから検証する方法」を試している。

¹³ 哲学関係では思想（2010）「特集ヘイドン・ホワイトの問題と歴史学」『思想』1036号岩波書店、歴史学関係では歴史評論（2009）「特集 歴史小説と日本近代史研究のあいだ」『歴史評論』705号校倉書房が出された。

¹⁴ 日本では1980年代から「言語論的転回」が提起されるようになった。多くの論があり、1例として野家啓一（1989）はウィットゲンシュタイン以降の英米系の分析哲学の流れを「言語論的転回」として整理している。歴史に関する論では、小田中直樹（2000）が歴史学での動向をまとめている。伊藤 博之（2001）は組織論研究の点から、また大塚良貴（2006）は、ヘイドン・ホワイトの「言語論的転回」に対する各種の反論をまとめている。こうした議論の日本での集約として野家啓一（2005）は世界と歴史を物語る行為について、今までの「言語論的転回」に関する議論をまとめながら考察している。

(Einstellung) ——すなわち、意味〔の位相〕を指示対象からその中で言説が表現されるコードへと逸らすような——によって後者が前者から区別される、という点にある。この見方からすれば、事実の著述とフィクションの著述の区別は、指示対象の現実性もしくは非現実性よりも、提示物の中に明示された「文学性」(修辭的技巧の使用)の度合いに左右される。したがって、事実に基づく文学的著述(ホイジンガの『中世の秋』のような歴史的著作が例になるかもしれない)と、フィクション的な文学的著述(例えば『フィネガンズ・ウェイク』[ジェイムズ・ジョイスの最後の小説])がありうる¹⁵。

ヘイドン・ホワイトは「事実に基づく言説とフィクションの言説」の差異は「メッセージに対する「構え」」の違いにあるとしている。それはつまり、言説に対する表現主体の意図による表現方法の選択が「事実に基づく言説とフィクションの言説」の差異を生みだしているということである。その点から言えば、「歴史王朝物」に限らず、芥川の小説では常にナラティブ(語り＝表現方法)が問題とされており¹⁶、その作品はヘイドン・ホワイトが述べているような課題について、つまり近代日本語の確立期において歴史(あるいは存在または事象)と物語との関係について一つの解答を与えた作品群ではないか、という点を従来取り上げられて来なかった問題として提起できるのではないだろうか。そこで、本論文では、芥川の小説について、その「歴史王朝物」というようなジャンル性がどのようなテクスト的特徴から生じているかについて考察をおこなうことで、芥川作品が持っているマルチ・ジャンルの「言語論的転回」に関わる言語的構造の一端を捉えてみたい。

¹⁵ 日本の立命館大学主催のシンポジウムでの講演。ヘイドン・ホワイト(2009)参照。(2011年8月7日閲覧)

¹⁶ 芥川作品を「語り」の点から考察する論考は多い。一例として高岸啓一(2007)は視覚的表現と聴覚的表現の両立という矛盾した課題を芥川が抱えていたと述べている。また、「語り」の問題は語り手の問題として、物語の「視点」の問題としても捉えられている。たとえば高野敦志(2006)は、「羅生門」では作品の世界の外から「作者」が語っているのに対して、「蜘蛛の糸」では「見えない語り手」が作品の世界を語っているとして、芥川作品の語り手が一定ではないことを示している。

3. 芥川作品におけるジャンル性

以下では、芥川龍之介の「歴史王朝物」の代表作と考えられる「羅生門」を取り上げ、「羅生門」の「歴史王朝物」というジャンル性がどのように生じているのかを、まず考察していきたい。そして、それとよく似た文章構成を持っているが、ジャンルは異なるとされてきた「キリシタン物」の「南京の基督」とを比較対照しながら、芥川作品におけるマルチ・ジャンルのテクニカルな特徴を捉えることにする。なお、以降でのジャンル性とは、作品の世界を社会的に便宜的に用いられる特定のジャンル性を持った空間として、またその登場者をそうしたジャンル性を持った存在として読者に認知させる言語的特徴であると定義する。文章構成を捉える方法には様々な論があるが、「羅生門」を文章構成の面から「事件の話をする文章」の典型として捉えたのは永尾章曹（1992）であり、ここではそれによって2作品の文章構成を捉えることにする。

3.1 「羅生門」の文章構成

以下、まず「羅生門」の文章構成を見る。永尾章曹（1992）は、「事件の話をする文章」の典型としての「羅生門」は、第一段階の「描写」と「説明」と、第二段階の「描写」と「説明」とから成っていると捉えている¹⁷。永尾章曹（1992）が分析した、その構成を以下に、表の形に直して示す。同時に、ここでは作品のジャンル性を決める手がかりを示していると考えられる語彙を取り出して見ることにする。その結果を表2に示した。

表2 「羅生門」の文章構成とジャンル性決定要素

（注1）描写欄の要素／永尾章曹（1992）の定義による。描写1（枠囲い）＝特定の

¹⁷ 永尾章曹（1992）P737は、「羅生門」のような文章構成の特徴を次のように述べている。「事件の話をする文章においては、描写と説明とは、まず、特定の時の、時の持続に従って変転を続けている事件を写すという意味で、特定の時に従うものと、話し手が、複数の話について、違うところを捨てて、共通するところを残して作るという意味で、特定の時を越えたものとして対比的に捉えられるようである。次に、特定の時の、時の持続に従って変転を続けている事件を写す文脈の展開のどこかで、時の流れを止めて、気分や気持に従って、その気分や気持に合致した情景を選択して、それぞれ別のことを、時には順序もなく並べ挙げているものと、前文を受けて、理由を言う、取り立てる、くわしくする等と、すべて前文を確かなものにするものとして対比的に捉えられるようである。描写と説明とは、基本的には、こうして二つの段階に分けて把握することができると思われるのである。」

時の提示、下線部分＝文脈起こし、二重下線＝文脈の展開）と描写2（イタリック体）に分かれる。

（注2）説明欄の要素／永尾章曹（1992）の定義による各段落の概要。説明1と説明2に分かれる。

（注3）ジャンル性欄の要素／歴史的語彙＝本文の網掛け部分（「羅生門」のジャンル性決定に関わる語彙）、多義的語彙＝太下線部分（「羅生門」の歴史的語彙の文脈の中で特定のジャンル性を創る語彙）

（注4）ローマ数字：段落番号、○数字：文番号

本文	描写	説明	ジャンル性
I ① <u>ある日の暮方の事である</u> 。② <u>一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。</u>	描写 1 I ① 特定の時の提示 ②文脈起こし		<u>歴史的語彙</u> 下人、羅生門
II ①広い門の下には、この男のほかに誰もいない。②ただ、所々丹塗の剥げた、大きな <u>円柱</u> に、蟋蟀が一匹とまっている。③羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。④それが、この男のほかに誰もいない。 III ①何故かと云うと、この二三年、 <u>京都</u> には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災がつづいて起った。②そこで洛中のさびれ方は一通りではない。③ <u>旧記</u> によると、 <u>仏像</u> や <u>仏具</u> を打碎いて、その <u>丹</u> がついたり、 <u>金銀の箔</u> がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。④洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。⑤するとその荒れ果てたのをよい事にして、 <u>狐狸</u> が棲む。⑥盗人が棲む。⑦とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。⑧そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである。 IV ①その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来た。②昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い <u>鴟尾</u> のまわりを啼きながら、飛びまわっている。③ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見えた。④鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。――⑤もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。⑥ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。⑦下人は七段	説明1 II、III 「広い門の下には、この男のほかに誰もいない」わけの説明 説明1 IV、V 羅生門の下で雨やみを待つ下人の様子の説明	<u>歴史的語彙</u> 下人、羅生門、朱雀大路、市女笠、揉烏帽子、辻風、洛中、盗人、平安朝の下人、申の刻下 <u>多義的語彙</u> 丹塗、円柱、京都、旧記、仏像、仏具、丹、金銀の箔、狐狸、鴟尾、主人	

ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。 V ①作者はさっき、「<u>下人が雨やみを待っていた</u>」と書いた。②しかし、<u>下人</u>は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。③ふだんなら、勿論、<u>主人</u>の家へ帰る可き筈である。④所がその主人からは、四五日前に暇を出された。⑤前にも書いたように、当時<u>京都</u>の町は一通りならず衰微していた。⑥今この<u>下人</u>が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。⑦だから「<u>下人が雨やみを待っていた</u>」と言うよりも「<u>雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた</u>」と言う方が、適当である。⑧その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。⑨申の刻下りからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。⑩そこで、<u>下人</u>は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さっきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。			
VI ①雨は、<u>羅生門</u>をつつんで、遠くから、ざあっと云う音をあつめて来る。②夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した<u>葺</u>の先に、重たくうす暗い雲を支えている。	描写 2 VI①、 ②		<u>多義的語彙</u> 葺
VII ①どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいる邊はない。②選んでいれば、<u>築土</u>の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。③そうして、この門の上へ持って来て、犬のように棄てられてしまうばかりである。④選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やっとこの局所へ達着した。⑤しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であつた。<u>下人</u>は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「<u>盗人</u>になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。		説明 1 VII <u>羅生門</u>の下で雨やみを待つ下人の様子の説明	<u>歴史的語彙</u> 下人、盗人 <u>多義的語彙</u> 築地
VIII ①<u>下人</u>は、大きな噓をして、それから、大儀そうに立上った。②夕冷えのする<u>京都</u>は、もう<u>火桶</u>が欲しいほどの寒さである。③風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。④<u>丹塗</u>の柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。 IX ①<u>下人</u>は、頸をちぢめながら、<u>山吹の汗疹に重ねた、紺の襖の肩</u>を高くして門のまわりを見まわした。②雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。③すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも<u>丹</u>を塗った梯子が眼についた。④上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。⑤<u>下人</u>はそこで、腰にさげた<u>聖柄の太刀</u>が鞘走らないように気をつけながら、<u>藁草履</u>	描写 1 文脈の展開 VIII① IX①、 ⑤ 描写 1 時の	説明 1 X ⑤、⑥、⑦、⑧ 説明 2 IX ②、③、④、X ④	<u>歴史的語彙</u> 下人、山吹の汗疹、襖、聖柄の太刀、鞘走る、羅生門 <u>多義的語彙</u> 噓、火桶、丹塗、丹、藁草履、楼

をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。 X ①<u>それから、何分かの後である</u>。②羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。③楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。④短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。⑤下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。⑥それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。⑦これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。⑧この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。	経過 X① 文脈 起こ し② 描写 2 Ⅷ②、 ③、④ X③		
---	--	--	--

以上、永尾章曹（1992）によれば、表2のように「羅生門」は「事件の話をする文章」の典型として第一段階の「描写」と「説明」および第二段階の「描写」と「説明」からなる文章構成を取っている。その中で第一段階の「描写」と「説明」は、「特定の時の、時の持続に従って変転を続けている事件を写す」「描写1」と「話し手が、複数の話について、違うところを捨てて、共通するところを残して作る」「説明1」からなる。「描写1」は、第Ⅰ段落文①「ある日の暮方の事である」という「特定の時の、時の持続に従って変転を続けている事件」の中での「特定の時の提示」から始まり、続いて文②「一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた」で「文脈起こし」が行なわれる。この「文脈起こし」で登場した人物の動きは以後、「1分経って」という「時の経過」を示す表現を入れることで、たどることができる。「時の経過」を示す表現を入れることができる部分は、第Ⅷ段落文①「下人は、～嚏をして、～、～立上った」そして、さらに第Ⅸ段落文①「下人は～見まわした」、文⑤「下人は～ふみかけた」と続く。一方、「説明1」は「描写1」と異なり「特定の時を超えたもの」であり、第Ⅱ段落から第Ⅴ段落までと第Ⅶ段落がそれにあたる。「説明1」の第Ⅱ、Ⅲ段落は、第Ⅱ段落文①「広い門の下には、この男のほかに誰もいない」のわけを説明している。続く第Ⅳ、Ⅴ段落および第Ⅶ段落も同じで、羅生門の下で雨やみを待つ下人の様子の説明である。永尾章曹（1992）の「描写1」は、

いわゆるストーリー（時の経過による話しの筋）であり、「説明 1」は、その背景や理由を説明するプロットにあたると言えよう¹⁸。これが「羅生門」の文章構成の基本をなしている。

さらに、第一段階の「描写」と「説明」を補うものとして、永尾章曹（1992）は第二段階の「描写」と「説明」をあげている。「描写 2」は、第Ⅵ段落文①②「雨は、～あつめて来る。夕闇は～空を低くして、～、門の屋根が、～うす暗い雲を支えている」や第Ⅷ段落文②③④のように、「事件を写す文脈の展開のどこかで、時の流れを止めて、気分や気持に従って、その気分や気持に合致した情景を選択して、それぞれ別のことを、時には順序もなく並べ挙げている」ものである。他方、「説明 2」は第Ⅸ段落の文①に対する文②、③、④や、第Ⅹ段落文③「～火の光が、～、その男の右の頬をぬらしている」に対する文④「～中に、赤く膿を持った面皰のある頬である」のように、「前文を受けて、理由を言う、取り立てる、くわしくする等と、すべて前文を確かなものにする」機能を果たしている。第二段階の「描写」と「説明」は、それぞれ第一段階の「描写」と「説明」にともなって「描写 2」は「気分や気持に合致した情景を選択して「並べ挙げ」、説明 2」は「前文を確かなものにする」。これらは、ストーリーとプロットを補完し、細部を具象化する文章構成と言えよう。

3.2 「羅生門」のジャンル性決定要素

このように「羅生門」は、まず基本的な文章構成から見た場合、文章の種類におけるジャンル性としては第一段階および第二段階の「描写」と「説明」で構成された文章と言える。では、その中で、「歴史王朝物」というジャンル性を決めているのは何であろうか。それはまず、表 2 の第Ⅰ段落「下人」、「羅生門」、第Ⅱ段落「朱雀大路」のような「歴史的語彙」であろう。これらの語彙は、ある特定の時代と社会（「羅生門」では平安時代の京都）の中の特定の対象（あ

¹⁸ ストーリーとプロットについては、石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織（1991）P88-93 参照。

る階層の人間「下人」や都市の特定の構造物「羅生門」「朱雀大路」を指示する語彙であり、それによってある時代や社会に特有であると受容者に想起される語彙である。同時に、その文脈中には、こうした「歴史的語彙」と関連することで特定のジャンル性を創る語彙として、第Ⅱ段落のたとえば「丹塗」、「円柱」、「京都」、「旧記」のような多義的語彙も使われている。これらは、時代を超えて使われている語彙であり、それだけではどの時代のものを指しているかはきめることができない。しかし「歴史的語彙」の文脈中で“平安時代の仏教寺院”“平安時代の京都”のような限定を受けることで、初めて特定の指示対象が焦点化されてジャンル性を生じる語彙である。「歴史的語彙」と「多義的語彙」を合わせて、ジャンル性を作品の受容者に与える語彙という意味で「ジャンル付与語彙」と呼ぶことにする。

3.3 「南京の基督」の文章構成とジャンル性

では、「キリシタン物」のような歴史性に関わらない作品ジャンルではどうか。次に時代が芥川当時の現代に置かれている「南京の基督」の文章構成とジャンル性を見る。表3にその結果を示した。

表3 「南京の基督」の文章構成とジャンル性決定要素

- (注1) 描写欄の要素／永尾章曹(1992)の定義による。描写1(枠囲い)＝特定の時の提示、下線部分＝文脈起こし、二重下線＝文脈の展開)と描写2(イタリック体)に分かれる。
- (注2) 説明欄の要素／永尾章曹(1992)の定義による各段落の概要。説明1と説明2に分かれる。
- (注3) ジャンル性欄の要素／地域的語彙、キリシタンの語彙＝本文の網掛け部分(「南京の基督」のジャンル性決定に関わる語彙)、多義的語彙＝太下線部分(「南京の基督」の地域的語彙、キリシタンの語彙の文脈の中で特定のジャンル性を創る語彙)
- (注4) ローマ数字：段落番号、○数字：文番号

本文	描写	説明	ジャンル性
I ① <u>或秋の夜半であつた</u> 。② <u>南京奇望街の或家の一間には、色の蒼ざめた支那の少女が一人、古びた卓の上に頬杖をついて、盆に入れた西瓜の種を退屈さうに噛み破つてゐた。</u>	描写1 I ①特定の時の提示 ②文脈起こし		<u>地域的語彙</u> 南京奇望街、支那の少女、西瓜の種

II ①卓の上には置きランプが、うす暗い光を放つてゐた。②その光は屋の中を明くすると云ふよりも、寧ろ一層陰鬱な効果を与へるのに力があつた。③壁紙の剥げかかった部屋の隅には、毛布のはみ出した簾の寝台が、埃臭さうな帷を垂らしてゐた。④それから卓の向うには、これも古びた椅子が一脚、まるで忘れられたやうに置き捨ててあつた。⑤が、その外は何処を見ても、装飾らしい家具の類なぞは何一つ見当らなかつた。	描写 2 II ①、③、④	説明 2 II ②、⑤	
III ①少女はそれにも関わらず、西瓜の種を噛みやめては、時々涼しい眼を挙げて、卓の一方に面した壁をぢつと眺めやる事があつた。②見ると成程その壁には、すぐ鼻の先の折れ釘に、小さな真鍮の十字架がつつましやかに懸つてゐた。③さうしてその十字架の上には、稚拙な受難の基督が、高々と両腕をひろげながら、手ずれた浮き彫の輪廓を影のやうにぼんやり浮べてゐた。④少女の眼はこの耶蘇を見る毎に、長い睫毛の後の寂しい色が、一瞬間何処かへ見えなくなつて、その代りに無邪気な希望の光が、生き生きとよみ返つてゐるらしかつた。⑤が、すぐに又視線が移ると、彼女は必吐息を洩らして、光沢のない黒繻子の上衣の肩を所在なささうに落しながら、もう一度盆の西瓜の種をぼつりぼつり噛み出すのであつた。	描写 2 III ①、②、③	説明 2 III ④、⑤	キリシタンの語彙 十字架、受難の基督、耶蘇 多義的語彙 黒繻子
IV ①少女は名を宋金花と云つて、貧しい家計を助ける為に、夜々その部屋に客を迎へる、当年十五歳の私窩子であつた。②秦淮に多い私窩子の中には、金花程の容貌の持ち主なら、何人でもゐるのに違ひなかつた。③が、金花程気立ての優しい少女が、二人とこの土地にゐるかどうか、それは少くとも疑問であつた。④彼女は朋輩の売笑婦と違つて、嘘もつかなければ我儘も張らず、夜毎に愉快さうな微笑を浮べて、この陰鬱な部屋を訪れる、さまざまな客と戯れてゐた。⑤さうして彼等の払つて行く金が、稀に約束の額より多かつた時は、たつた一人の父親を、一杯でも余計好きな酒に飽かせてやる事を楽しみにしてゐた。 V ①かう云ふ金花の行状は、勿論彼女が生れつきにも、拠つてゐるのに違ひなかつた。②しかしまだその外に何か理由があるとしたら、それは金花が子供の時から、壁の上の十字架が示す通り、歿くなつた母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰をずっと持ち続けてゐるからであつた。 VI ①——さう云へば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに来た、若い日本の旅行家が、金花の部屋に物好きな一夜を明かした事があつた。②その時彼は葉巻を啣へて、洋服の膝に軽々と小さな金花を抱いてゐたが、ふと壁の上の十字架を見ると、不審らしい顔をしながら、④「お前は耶蘇教徒かい。」と、覺束ない支那語で話しかけた。 (中略)		説明 1 IV、V 宋金花の生活と性格の説明 VI～X 宋金花の信仰と梅毒に感染した後の様子	地域的語彙 宋金花、私窩子、秦淮、上海、南部支那、支那語、陳山茶、鴉片酒、毛迎春、汞藍丸、迦路米 キリシタンの語彙 十字架、羅馬加特力教、耶蘇教徒 多義的語彙 売笑婦、洋服、葉巻、日本、楊梅瘡、煙草、客、鼠繻子、翡翠の輪

⑤「これはさつき日本へ土産に買った耳環だが、今夜の記念にお前にやるよ。」―― VII ①金花は始めて客をとった夜から、実際かう云ふ確信に自ら安んじてゐたのであつた。 VIII ①所が彼は一月ばかり前から、この敬虔な私窩子は不幸にも、悪性の楊梅瘡を病む体になつた。②これを聞いた朋輩の陳山茶は、痛みを止めるのに好いと云つて、鴉片酒を飲む事を教へてくれた。③その後又やはり朋輩の毛迎春は、彼女自身が服用した汞藍丸や迦路米の残りを、親切にもわざわざ持つて来てくれた。④が、金花の病はどうしたものか、客をとらずに引き籠つてゐても、一向快方には向はなかつた。 IX ①すると或日陳山茶が、金花の部屋へ遊びに来た時に、こんな迷信じみた療法を尤もらしく話して聞かせた。 ②「あなたの病氣は御客から移つたのだから、早く誰かに移し返しておしまひなさいよ。さうすればきつと二三日中に、よくなつてしまふのに違ひないわ。」 (中略) X ①かう決心した宋金花は、その後山茶や迎春にいくら商売を勧められても、剛情に客をとらずにゐた。②又時々彼女の部屋へ、なじみの客が遊びに来て、一しよに煙草でも吸ひ合ふ外に、決して客の意に従はなかつた。 ①「私は恐しい病氣を持つてゐるのです。側へいらつしやると、あなたにも移りますよ。」 X I ①それでも客が酔つてでもゐて、無理に彼女を自由にしようとする、金花は何時もかう云つて、實際彼女の病んでゐる証拠を示す事さへ憚らなかつた。②だから客は彼女の部屋には、おひおひ遊びに来ないやうになつた。③と同時に又彼女の家計も、一日毎に苦しくなつて行つた。……			
X II ①今夜も彼女はこの卓に倚つて、長い間ぼんやり坐つてゐた。②が、不相変彼女の部屋へは、客の来るけはひも見えなかつた。③その内に夜は遠慮なく更け渡つて、彼女の耳にはひる音と云つては、唯何処かで鳴いてゐる蟋蟀の声ばかりになつた。④のみならず火の氣のない部屋の寒さは、床に敷きつめた石の上から、次第に彼女の鼠繻子の靴を、その靴の中の華奢な足を、水のやうに襲つて来るのであつた。	描写 2 X II ①、②、③、④		多義的語彙 客、鼠繻子、翡翠の輪
X III ①金花はうす暗いランプの火に、さつきからうつとり見入つてゐたが、やがて身震ひを一つすると翡翠の輪の下つた耳を掻いて、小さな欠伸を嚙み殺した。②すると殆その途端に、ペンキ塗りの戸が勢よく開いて、見慣れない一人の外国人が、よろめくやうに外からはひつて来た。③その勢が烈しかつたからであらう。④卓の上のランプの火は、一しきりぱつと燃え上つて、妙に赤々と煤けた光を狭い部屋の中に漲らせた。⑤客はその光をまともに浴びて、一度は卓の方への	描写 1 X III 宋金花の文脈の展開① 第二の登場者の文脈起こし②(波線)		多義的語彙 翡翠の輪

めりかかったが、すぐに又立ち直ると、今度は後へたじろいで、今し方しまったペンキ塗りの戸へ、どしりと背を凭せてしまった。	第二の登場者の文脈の展開⑤（波線） 描写 2 ③④		
---	---------------------------------	--	--

「南京の基督」も表 3 のように、先に見た表 2 「羅生門」と同じく、「描写 1」と「説明 1」が文章構成要素の大部分を占めてストーリーとプロットになっており、同時に「描写 2」と「説明 2」とがその密度を高める形で構成された文章と言える。つまり、文章構成上、「歴史王朝物」の「羅生門」と「キリシタン物」の「南京の基督」には、そして、その中で「キリシタン物」というジャンル性を決めているのは表 4 の「羅馬加特力教」、「耶蘇教徒」のような「キリシタンの語彙」であり、同時に、その文脈の中で「南京奇望街」、「支那の少女」のような「地理的語彙」もたとえば「中国物」というような特有の別ジャンルを作り得る語彙になっている。さらに、こうした語彙との関連の中で「売笑婦」、「日本」、「洋服」のような「多義的語彙」が機能していると思われる。「南京の基督」においても「羅生門」と同じく「ジャンル付与語彙」がそのジャンル性を作っているのである。

3.4 芥川作品におけるジャンル付与の構造

「歴史王朝物」の「羅生門」と「キリシタン物」の「南京の基督」は、いずれも永尾章曹（1992）の定義による第一段階と第二段階の「描写」と「説明」から成る同一の文章構成をとっており、文章の基本的種類という意味でのジャンルから言えば、まったく同じ文章ジャンルをなしている。しかし、今まで研究で用いられてきた「歴史王朝物」というジャンル性では「歴史的語彙」と「多義的語彙」が、また「キリシタン物」というジャンル性では「キリシタンの語彙」が、それぞれ作品におけるジャンル性の決定に重要な役割を果たしている。ここから芥川作品においては、同じ文章構成の中で「ジャンル付与語彙」の切り換えにより、見かけ上ジャンル性に変

化を持たせ、違う時代や空間に受容者を誘導するという方法が採られていることが明らかになったと言えよう。

しかし、こうした「ジャンル付与語彙」だけで、はたして「歴史王朝物」「キリシタン物」というようなジャンル性が決まってきたのだろうか。それを確かめるために、表2で見た文章構成はそのままにして、取り出した「歴史的語彙」と「多義的語彙」だけを入れ替えて、別な時代の「羅生門」ができるかどうかを試してみた。その結果を表4に示した。

表4 ジャンル付与性語彙を入れ替えた「羅生門」

(注1) 歴史的語彙は太字、多義的語彙は下線部

本文	ジャンル性語彙
I ①ある日の暮方の事である。②一人のサラリーマンが、東京駅の入り口で雨やみを待っていた。	歴史的語彙 サラリーマン、東京駅
II ①広い入り口の下には、この男のほかに誰もいない。②ただ、所々ペンキの剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。③東京駅が、丸の内の近くにある以上は、この男のほかに、雨やみをするOLやスーツ姿が、もう二三人はありそうなものである。④それが、この男のほかに誰もいない。	歴史的語彙 丸の内、OL、スーツ姿 多義的語彙 ペンキ、円柱、東京、竜巻、エネルギー危機、都内、『朝日新聞』、パソコン、モニター、ケース、パーツ、燃料、強盗団、駅舎、駅
III ①何故かと云うと、この二三年、東京には、地震とか竜巻とか火事とかエネルギー危機とか云う災害がつづいて起った。②そこで都内のさびれ方は一通りではない。③『朝日新聞』によると、パソコンやモニターを打碎いて、その破片がついたり、ケースがついたりしたパーツを、路ばたにつみ重ねて、燃料代わりに売っていたと云う事である。④都内がその始末であるから、東京駅の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。⑤するとその荒れ果てたのをよい事にして、烏が棲む。⑥強盗団が棲む。⑦とうとうしまいには、引取り手のない死人を、駅舎へ持って来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。⑧そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この駅の近所へは足ぶみをしてない事になってしまったのである。	

歴史的語彙と多義的語彙を入れ替えた「羅生門」の結果は以上の通りで、文章構成と文型はまったく同じまま、近未来あるいは現代に時代を置き換えたパロディーの「羅生門」を作ることができた。このように芥川作品では、同一の文章構成を保ったまま「ジャンル付与語彙」を入れ替えるだけで、それぞれ異なる特定の時代と社会に合わせて、別な作品に作り替えることが可能である場合が少な

くないと思われる。このことから、芥川作品について今まで「歴史王朝物」、「キリシタン物」のようなジャンル区分が決定されてきたテキスト的構造は、物語の外にあって、現実の歴史として志向される歴史的世界を物語内に再現する点に重点があるのではなく、物語を読む方向性を決定する「歴史的」、「キリシタンの」、「地域的」語彙とそれに関連する「多義的語彙」という「ジャンル付与語彙」から生まれた世界像の形成に中心があったことが分かる。そして、「ジャンル付与語彙」は、同時に「羅生門」での「歴史物」、「平安物」、「南京の基督」での「キリシタン物」、「中国物」のようなマルチ・ジャンルの性格をも形成している。こうした「ジャンル付与語彙」は物語を読む読者に、焦点として幾種類化の物語の世界像を結ばせる役割を果たしていると考えられる。

4. おわりに

以上、「羅生門」を「南京の基督」と比較しながら、文章構成とジャンル性が付与される表現を考察してきた。見てきたような芥川作品の文章構成とジャンル性決定要因との関係を示すと、以下の図1のようになるであろう。

図1 「羅生門」「南京の基督」の文章構成とジャンル性決定の関係

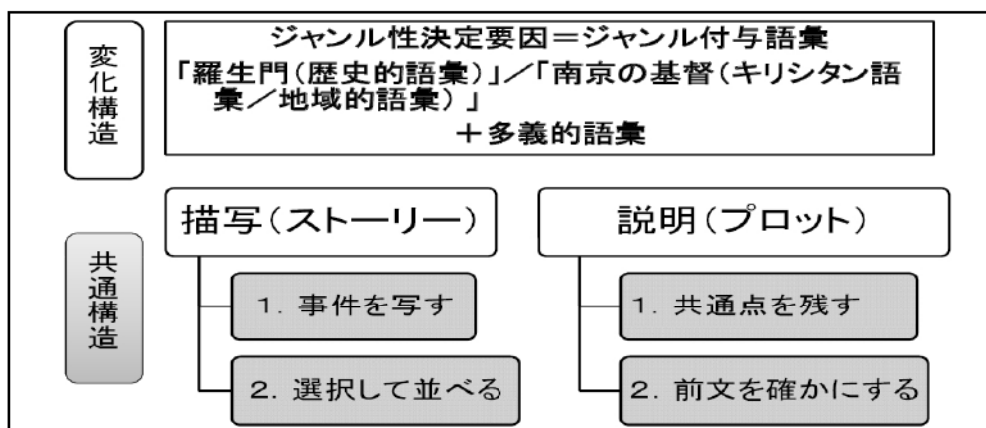


図1のように芥川作品において文章構成としてのジャンルは、

永尾章曹（1992）の定義による第一段階と第二段階の「描写」と「説明」から成る同一の文章構成をとって、それが作品における基礎としてストーリーとプロットを形成している。これは、「歴史王朝物」の「羅生門」でも「キリシタン物」の「南京の基督」でも同一の共通構造であるが、図と地の関係で言えば受容者からは見えにくい地に属するジャンルである。一方、読者そして研究者に受容される場合は、ジャンル付与語彙（歴史、キリシタン、地域など）と、それに関わって具体的意味が確定される多義的語彙による変化構造のほうが浮き上がる図のジャンルとして受容され、ジャンル付与語彙の指示する対象としての「羅生門」等から浮かぶ平安時代という歴史性あるいは「南京の基督」でのキリスト教信仰や 20 世紀前半の中国などの文脈の中で、ストーリーとプロットが解釈されてきた¹⁹。しかし、テキスト的視点から見れば文章構成上の類別としてのジャンルが作品分類の基礎であり、ジャンル付与語彙は其中で初めて機能する記号である。

以上の結果から、第 1 節で論じたようなジャンルの問題に関して、従来は文章中のジャンル付与語彙が指示する外的指示対象（世界）が作品の文章ジャンルを決めているように考えられてきたが、実は文章構成の種類としてのジャンルに拠って受容者が受容した語彙の記号性が外的指示対象（世界）を一種の図として作品中に浮上させていたと考えられる。従来のジャンル区分は受容結果のひとつの図だったのである。芥川作品を巡るマルチ・ジャンル性と「言語論的転回」の仕組みも、この点から理解できよう。小説、歴史、散文詩など文章の種類上異なるジャンルを表現主体が作品で選んだ場合、ジャンル付与語彙とそれが浮上させる文脈は、ヘイドン・ホワイト（2009）が述べたように文章の種類としてのジャンルに応じて非常

¹⁹ ジャンル付与語彙によるジャンル性から作品を解釈する傾向は、現在でも顕著である。「羅生門」に関しては注 9 参照。また、「南京の基督」に関する論は、細川正義（2000）参照。こうした傾向は、1970 年代の宮坂覚（1976）などから、最近の足立直子（2003）、張如意（2005）などのように研究の初期から現在まで続き、「南京の基督」については芥川とキリスト教、芥川と中国との関係から作品を捉えようとする研究が今まで主流になってきた。

に異なってしまう場合がありえる。テキストの種類としての作品ジャンルの違いによって、指示し再現すべき記号内容は同一とは言えないからである。たとえば、小説が指示する存在としての「羅生門」はイメージとして『今昔物語』や講談が描く「羅生門」を念頭に置いて問題はないであろうが、歴史学が歴史的存在として「羅生門」の存在や都市機能あるいは平安時代の歴史像を小説「羅生門」の指示対象として作品解釈の基礎に導入すべきかどうかは、慎重な検討が必要だろう。歴史学の描く「羅生門」は平安時代の再現を指示対象とする表現意図があると考えられるが、小説である芥川の「羅生門」にそうした歴史学的意図があるかどうかは、作品の読みの方向性を決めてしまう重要な問題だからである。

テキストの受容者はジャンル付与語彙によるジャンル性から離れることで、作品の受容と研究に別な局面が開けるのではないだろうか。たとえば、芥川では「羅生門」と「南京の基督」のストーリーとプロットは、文章構成と同時に、内容（プロット）の共通点も多く持っている。その主人公である下人も私窩子も社会的底辺に置かれた存在であり、そのプロットとして下人は主人から暇を出され、私窩子の宋金花は梅毒のために商売ができず経済的に困窮して生か死かを決めなくてはならないという追い詰められた状況にある。また、作品の空間である平安京は衰微し、作品が書かれた当時の1920年代に中国国民党革命の舞台であった南京も革命期の混迷の中にあっただと考えられ、大都市が危機にあった点は同じである。この点から言えば文章構成と内容（プロット）に共通点のある「羅生門」と「南京の基督」を一つのジャンルにすることも可能である。そのキーワードは、たとえば社会的混乱中の生死の選択であろう。このように文章構成の共通性に目を向けることで、今までの「歴史王朝物」と「キリシタン物」というジャンル付与語彙によるジャンル区分では見えてこなかった共通点を見出し、新しい作品のジャンル区分をすることが可能であろう。それは同時にまた、ジャンル付与語彙によるジャンル区分から派生してきた今までの歴史性、宗教性、地域

性などの指示対象の問題からも離れた作品の読みを可能にすると言えよう²⁰。表現におけるジャンルの問題は、このように看過できない重要な問題の領域と受容の多義性を提示しており、テキストとは何かを理解する鍵を与えている。今回、一定の手掛かりが見つかったテキストにおける文章構成とジャンル決定要因および指示対象の関係について、今後とも考察を続けていきたい。

付記

本論文は2011年5月の淡江大学日本語文学科主催「芥川龍之介與東亞國際學術研討會」で口頭発表した内容に大幅な訂正、加筆を行ったものである。また、本研究は2009年度台湾国家科学委員会專題研究 NSC 98-2410-H-032-069-による研究成果である。

参考文献

- 浅野洋、海老井英次、石割透、清水康次、関口安義、宮坂覺編（1999-2000）『芥川龍之介作品論集成』翰林書房
- 足立直子（2003）「芥川龍之介『南京の基督』論：宋金花の〈折り〉における宗教性」『日本文藝研究』55-1
- 荒木正純（2010）『羅生門と廃仏毀釈』悠書館
- 石原千秋・木股知史・小森陽一・島村輝・高橋修・高橋世織（1991）『読むための理論—文学・思想・批評』世織書房
- 伊藤博之（2001）「組織の歴史的伝統の探求：物語論の観点から（山内隆教授退官記念論文集）」『彦根論叢』第329号
- 岩波書店編（2004）『広辞苑第5版』岩波書店
- Wikipedia「Category:小説のジャンル」（2011年7月30日閲覧）
- 大塚良貴（2006）「歴史的出来事の実在性をどう考えるか：A・C・ダントーにおける歴史の物語り論の検討」『待兼山論叢・哲学篇』40
- 小田中直樹（2000）「言語論的転回と歴史学」『史學雑誌』109-9
- 金偉・呉彦（2010）「丹塗の剥げた大きな円柱—芥川の「羅生門」と『今昔物語集』」『文芸論叢』74
- 国語学会（1973）『国語学辞典 第22刷』東京堂
- 国語学会（1980）『国語学大辞典』東京堂出版
- 小谷瑛輔（2010）「芥川龍之介の初期作品における反語的完結性—「羅生門」「鼻」「酒虫」を中心に」『国語と国文学』87(10)
- 小林英夫（1940）「現代作家の文体—芥川龍之介と室生犀星—」『文学』8-9 岩波書店
- 小谷野敏（2010）「羅生門」は名作か？（特集 芥川龍之介を読み直す）『国文学：解釈と鑑賞』75-2
- 思想（2010）「特集 ヘイドン・ホワイトの問題と歴史学」『思想』1036 岩波書店
- 清水康次（2010）「下人の物語の始まりと終わり—芥川龍之介「羅生門」（特集〈終わり〉を読む—近現代文学篇）—（〈終わり〉を読む）」『国文学：解釈と鑑賞』75-9
- 高寄啓一（2007）「芥川龍之介における「語り」についての一考察：その散文観から」『近代文学試論』45
- 高野敏志（2006）「芥川龍之介の小説に見られる視点の重層性：「羅生門」「蜘蛛の糸」「報恩記」において」『早稲田日本語研究』15 早稲田大学日本語学会
- 武田庄三郎（1985）「ジャンル」長谷川泉・高橋新太郎編『文芸用語の基礎知識』至文堂

²⁰ ジャンル性付与語彙によるジャンル区分から芥川作品を読まないで、作品を捉えようとした研究の一つは、作家論的な表現主体の立場から作品当時の記号性を探る研究である。こうした研究の例として、橋浦洋志（1993）がある。もう一つは、各作品に京津する語りの問題を捉えた研究で牧野陽子（2005）などがある。

- 張如意 (2005)『『南京の基督』試論—芥川における中国社会認識』『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』6
- 東京書籍 (2011)「平成24年度用・中学校「新しい国語」読むこと」の掲載作品ジャンル一覧(文学)」東京書籍 http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/chu24/subject/kokugo/content/kokugo_file2.pdf (2011年8月3日閲覧)
- 時枝誠記 (1960)『文章研究序説』山田書房
- 中村明 (1967)『『東洋の秋』の文章』『文体論学会』11
- 永尾章曹 (1992)「描写と説明について」『小林芳規博士退官記念国語学論集』汲古書院
- 二杉健 (2010)「芥川龍之介「羅生門」指導方法についての一考察」『富山大学国語教育』35
- 日本語学会 (2007)『日本語学研究事典』明治書院
- 日本語教育学会 (1987)『日本語教育事典 縮刷版』大修館書店
- 日本語教育学会 (2005)『新版 日本語教育事典』大修館書店
- 根岸正純 (1967)「芥川龍之介の方法と文体」『文体論研究』11 文体論学会
- 野家啓一 (1989)「言語論的転回」の意味するもの」『神奈川大学言語研究』12
- 野家啓一 (2005)『物語の哲学』岩波書店
- 萩原朔太郎 (1942)「芥川龍之介の小断想」(河出書房新社 (1988)『新装版文芸読本・芥川龍之介』河出書房新社
- 橋浦洋志 (1993)「『南京の基督』考—物語と小説の間」『茨城大学教育学部紀要—人文・社会科学・芸術』42
- 波多野完治 (1940)「芥川龍之介の文体」『文学』8-8 岩波書店
- ロラン・バルト (1979)『物語の構造分析』みすず書房
- 藤井俊博 (2003, 2004)「物語文の表現と文末形式—芥川作品を通して(上)(下)」『同志社国文学』59, 60 同志社大学
- 細川正義 (2000)「南京の基督」『芥川龍之介全作品研究辞典』勉誠出版
- ヘイドン・ホワイト (2009)「ポストモダニズムと歴史叙述」『特別公開企画 アフター・メタヒストリー—ヘイドン・ホワイト教授のポストモダニズム講義—』立命館大学 http://www.ritsumeai.ac.jp/acd/gr/gsce/news/200901022_repo_0.htm (2011年8月7日閲覧)
- 牧野陽子 (2005)「芥川龍之介「南京の基督」における<語りの構図>」『成城大学経済研究』170
- 宮坂覚 (1976)「『南京の基督』論：金花の<仮構の生>に潜むもの」『文芸と思想』40
- 矢原豊祥 (2010)「学習指導要領の特色を活かした小説教材の学習指導の工夫—小説「羅生門」(芥川龍之介)の場合」『国語教育研究』51
- 吉田裕久・山元隆春・朝倉孝之・岡本恵子・黒瀬直美・新治功・西原利典・増田知子・三根直美・宮本浩治 (2010)「確かな学力の育成：国語基本教材の授業アプローチの方法『羅生門』(芥川龍之介)の場合」『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』38
- 歴史評論 (2009)「特集 歴史小説と日本近代史研究のあいだ」『歴史評論』705 校倉書房

※2011年8月31日受理・誓約 2011年9月29日審査通過

References

- Adachi, N. (2003) Akutagawa Ryunosuke “Nankin no kirisuto” ron: So Kinka no “inori” ni okeru syukyosei. *Nihon bungei kenkyu*, 55-1. Kanseigakuin daigaku, Japan.
- Araki, M. (2010) *Rashomon to haibutsu kishaku*. Yushokan, Japan.
- Asano, Y. & Ebii, E. & Ishiwari, T. & Shimizu, K. & Sekiguchi, Y. & Miyasaka, K. (Eds.) (1999-2000) *Akutagawa Ryunosuke sakuhinron shusei*. Kanrinshobo, Japan.
- Barthes, R. (1961-1971) *Introduction à l'analyse structurale du récit*. Seuil, Paris. (Trs.) by Hanawa, H. (1979) *Monogatari no kozo bunseki*. Misuzushobo, Japan.
- Cho, J. (2005) “Nankin no Kirisuto” shiron: Akutagawa ni okeru Chugoku shakai ninshiki. *Miyagigakuin joshidaigaku daigakuin jinbun gakkai*, 6. Miyagigakuin joshidaigaku, Japan.
- Fujii, T. (2003, 2004) Monogatari no hyogen to bunmatsu keishiki: Akutagawa sakuhin wo toshite 1&2. *Doshisha kokubungaku*, 59&60. Doshisha daigaku, Japan.

- Hagiwara S. (1942) Akutagawa Ryunosuke no Shodanso. Kawadeshobo shinsha(Eds.) (1988) *Shinsoban bungei dokuhon: Akutagawa Ryunosuke*. Kawadeshobo shinsha, Japan.
- Hashiura, H. (1993) "Nankin no Kirisuto" ko: monogatari to shosetsu no aida. *Ibaraki daigaku kyoiku gakubu kiyo:jinbun,shakaikagaku,geijutsu*,42. Ibaraki daigaku, Japan.
- Hatano, K. (1940) Akutagawa Ryunosuke no buntai. *Bungaku*,8-8. Iwanamishoten, Japan.
- Hosokawa, M. (2000) "Nankin no Kirisuto", *Akutagawa Ryunosuke zensakuhin kenkyu jiten*. Benseishuppan, Japan.
- Ishihara, C. & Kimata, S. & Komori, Y. & Shimamura, T. & Takahashi, O. & Takahasi S. (1991) *Yomu tame no riron: bungaku, shiso, hihyo*, Seorishobo, Japan.
- Ito, H. (2001) Soshiki no rekishiteki dento no tankyu: Monogatariiron no kantenkara, *Hikone Ronso*,329. Shiga daigaku, Japan.
- Kin, I. & Go, Gen. (2010) On Akutagawa Ryunosuke's "Rashomon" and Konjaku monogatari shu. *Bungei ronso*,74. Otani daigaku, Japan.
- Kobayashi, H. (1940) Gendaisakka no buntai: Akutagawa Ryunosuke to Murou Saisei. *Bungaku*, 8-9. Iwanamishoten, Japan.
- Kotani, E. (2010) Akutagawa Ryunosuke no shokisakuhin ni okeru hangoteki kanketsusei: "Rashomon", "Hana", "Sakamushi" wo chushin ni. *Kokugo to Kokubungaku*,87-10. Gyosei, Japan.
- Koyano, A. (2010) "Rashomon" wa meisaku ka? *Kokubungaku:kaishaku to kansho*,75-2. Shibundo, Japan.
- Makino, Y. (2005) Akutagawa Ryunosuke "Nankin no Kirisuto" ni okeru "katari no kozo". *Seijo daigaku keizai kenkyu*,170. Seijo daigaku, Japan.
- Miyasaka, S. (1976) "Nankin no Kirisuto" ron: Kinka no "kako no sei" ni hisomu mono. *Bungei to shiso*,40. Fukuoka joshidaigaku, Japan.
- Nagao, S. (1992) Byosha to setsume ni tsuite. *Kobayashi Yoshinori hakushi taikan kinen kokugogaku ronbunshu*. Kyukoshoin, Japan.
- Nakamura, A. (1967) "Toyo no Aki" no bunsho. *Buntairon kenkyu*,11. Buntairon gakkai, Japan.
- Negishi, M. (1967) Akutagawa Ryunosuke no hoho to buntai. *Buntairon kenkyu*,11. Buntairon gakkai, Japan.
- Nisugi, K. (2010) Akutagawa Ryunosuke "Rashomon" shido hoho ni tsuite no ichi kosatsu. *Toyama daigaku kokugo kyoiku*,35. Toyama daigaku, Japan.
- Noe, K. (1989) "Gengoronteki tenkai" no imisuru mono. *Kanagawa daigaku gengokenkyu*, 12. Kanagawa daigaku, Japan.
- Noe, K. (2005) *Monogatari no tetsugaku*. Iwanamishoten, Japan.
- Odanaka, N. (2000) Linguistic Turn and Historical Studies. *Shigaku Zasshi*,109-9. Shigakukai(The Historical Society of Japan), Japan.
- Otsuka, Y. (2006) How Should We Consider the Reality of the Historical Event? : An examination of A. C. Danto's narrative theory of history. *Machikaneyama Ronso: Tetsugakuhen*,40. Osaka daigaku, Japan.
- Shimizu, K. (2010) Genin no monogatari no hajimari to owari: Akutagawa Ryunosuke "Rashomon". *Kokubungaku: kaishaku to kansho*,75-9. Shibundo, Japan.
- Takano, A. (2006) Akutagawa Ryunosuke no shosetsu ni mirareru shiten no jyusosei: "Rashomon" "Kumonoito" "Hoonki" ni oite. *Waseda nihonkenkyu*,15. Waseda daigaku nihongo gakkai, Japan.
- Takasaki, K. (2007) Akutagawa Ryunosuke ni okeru "katari" ni tsuite no ichikosatsu : sono sanbunkan kara. *Kindaibungaku shiron*,45. Hiroshima daigaku, Japan.
- Takeda, S. (1985) Janru. In Hasegawa, I. & Takahashi, S. (Eds.) *Bungei yogo no kisochishiki*. Shibundo, Japan.
- Tokieda, M. (1960) *Bunsho kenkyu josetsu*. Yamadashobo, Japan.
- Yahara, H. (2010) Gakushu shido yoryo no tokushoku wo ikashita shosetsu kyoza ni gakushu shido no kufu: shosetsu "Rashomon" Akutagawa Ryunosuke no baai. *Kokugo kyoiku kenkyu*,51. Hiroshima daigaku, Japan.
- Yoshida, H. and others. (2010) Tashikana gakuryoku no ikusei: kokugo kihon kyoza ni jugyo apurochi no hoho "Rashomon" Akutagawa Ryunosuke no baai. *Hiroshima daigaku gakubu fuzokugakko kyodo kenkyu kiyo*, 38. Hiroshima daigaku, Japan.

編集委員會

召 集 人 曾秋桂

副召集人 楊錦昌 許均瑞 林青樺

編集委員 鄭婷婷 蘇文郎 王世和 林雪星 范淑文
陳淑娟 馬耀輝 劉長輝 陳文敏 內田康
堀越和男

執行編輯 廖育卿 內田康 落合由治

助理編集 劉于涵

論文と教育研究報告の投稿に関する外部審査の結果、全投稿 32
本中、21 本が掲載された。今号の掲載率は 65.6%である。

台灣日本語文學報 30

出版者：台灣日本語文學會

理事長 曾秋桂

會 址：25137 台北縣淡水鎮英專路 151 號

淡江大學日本語文學系

傳 真：(+886) 02-2620-9915

網 站：http://www.geocities.jp/taiwan_nichigo/

出版日：2011 年 12 月 31 日

ISSN 1727-2262

JOURNAL OF JAPANESE LITERATURE & LANGUAGE IN TAIWAN 30

CONTENTS

Foreword

Tseng, Chiu-kuei	The 30th publication foreword.....	1
------------------	------------------------------------	---

Research Articles

Tseng, Chiu-kuei	A discourse strategy operated by author in "Hanjitsu":About a viewpoint from his family to Meiji society of Mori Ogai.....	3
Toda Kazuyasu	"Shun-En" by Ye Shi-tao; The structure of fiction.....	27
Lai, Yun-Chuang	"Pandora's Box" of Dazai Osamu:the writing way in an epistolary style novel	53
Wang, Wei-Ting	Self-commentary of "Diary of Sixteen-years-old":The relevance to early Showa era's "Children's article composition"	77
Liao, Hsiu-Chuan	The discuss of Dazai Osamu's December 8:the hidden thought of the wife.....	101
Lin, Hseuh-Hsing	The Image of Interpreters in Haruko Ushijima's Works : Centered on "Officer Wang" and "A Man Called Zhu".....	123
Wang, Shih-Ho	A Study of the Noun-stop Form Sentence:Its Characteristics, system, and Expressive Effects	149
Lin, Chin-Hwa	A Study of the Semantic Analysis of "-temoii":On the unrealized Events.....	169
Yoshida Taeko	Cohesion of 'Noda' in Japanese.....	193
Huang, Chi-Cheng	A Study of Event Expression Function of "-Sokonau"	219
Hung, Hsin-Yi	Perception of a Japanese Geminate Stop:Using Closure Duration and Duration of Preceding Vowel as Major Variables.....	245
Wu, Chin-Fang	"Overlap"of the utterance in the conversation:using the case study of "the task point talks" in CSJ (Corpus of Spontaneous Japanese).....	267
Ochiai Yuji	A genre characteristics in novel text: Some considerations by text constitution of Akutagawa Ryunosuke's "Rekishu Oucho Mono".....	293
Lin Hui-Jun	The suffix usage of Kango morpheme"-FU":The contrastive Analysis between Japanese and Chinese.....	319
Kagami Tomiyo	How Taiwanese students' perceptions of Japan are formed:	
Horikiri Yukiko	In relation to interests and knowledge of Japan.....	345
Moriya Tomomi		
Yang Mengsyun		
Lu, Jin-Ji	A Research on Learning Belief and Strategies of Taiwanese College Students for Japanese Learning:Taking Japanese Majors as Research Objects.....	369
Lo, Hsiao-Chin	The Possibility of Peer Responses from Views of Japanese Students in Taiwan: Using the TAE Steps.....	393
Lai, Yu-Chin	The Loyalty of Edo Period Samurai: Focusing on Ako incident.....	419

Survey Articles

Chen, Tzu-Ching	Using TAE to Enhance Development of Linguistic Expression in Japanese Conversation Class : A case study of Advance Japanese Conversation Class.....	441
Hsu, Chun-Jui	An Essay on Utilizing a "Japanese in Newspapers" Course to Develop Japanese Language Learners' Ability to "Problem-Finding":With Special Interest on Using a Whole Newspaper	465
Wang, Yu-Ling	A study on the Japanese Learning in a Taiwanese Family:based on a longitudinal investigation	491

Activities Report

Abstract of reports in regular meetings.....	517
--	-----

December 2011

JAPANESE LANGUAGE & LITERATURE ASSOCIATION OF TAIWAN